

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：24403
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2015～2017
 課題番号：15K01920
 研究課題名(和文) 若年層の労働と生活—経済、ケア、愛着、権力にみる世帯内依存関係のジェンダー分析

研究課題名(英文) Work and Life of young people in Japan: gender analysis of the intrahousehold dependence relationship of economy, care, emotion and power

研究代表者
 伊田 久美子 (Ida, Kumiko)

大阪府立大学・人間社会システム科学研究科・教授

研究者番号：20326242

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は深刻化する貧困と拡大する格差について若年層の生活の質に焦点を当てたデータのジェンダー分析を行った。特に世帯への包摂の質、つまり世帯内依存関係を視野に入れた生活の質を分析対象とした。
 その結果次の知見を得た。女性は男性と異なり、自分の納得する生き方の選択(エイジェンシー)が幸福度を低下させる傾向がある(マイナス効果)。既婚女性の暴力リスクは概して高く女性の収入増によりさらに高くなる(バックラッシュ型)。既婚女性の幸福度は他の婚姻同居形態に比べて高いが、既婚女性間の比較では専業主婦の自尊感情は雇用者に比べて低い。親同居未婚者は男女とも一人暮らしや既婚者に比べて収入も幸福度も低い。

研究成果の概要(英文)：The issue of women's poverty continues to be marginalized and in particular the situation of women who are part of a household either through living with their parent(s) or married, considered "included", aren't regarded as having any need for social support. There is a tendency to believe that women living in households are 'dependents' either of their parents or husbands.
 Our research examines the quality of life of young women living in households focusing on the quality of "inclusion", the relationship of dependence. We analysed the data of our research online survey, focusing on employment, happiness, violence and self-esteem as variables. Main findings are following: (1) Women's agency possibly reduces their happiness level. (2) Income of married women tends to increase the risk of violence. (3) Married women have higher sense of happiness but lower level of self-esteem than employed women. (4) those living with parents have lower income and the sense of happiness.

研究分野：ジェンダー論、労働論、イタリア・フェミニズム研究

キーワード：若年女性 依存関係 世帯内包摂 生活の質 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

2000年代のグローバル経済危機によって進行した労働の非正規化と格差の拡大は若年層に大きな影響をもたらした。しかし非正規、貧困問題の研究分析では非正規、貧困問題は主として男性に代表され、女性については「標準」世帯から「逸脱」したケースには関心が向けられるようになってはきたが、「標準」世帯に「包摂されている」女性の実情には労働研究においても貧困、社会的排除研究においても、関心が向けられず、世帯収入に隠れて不可視化している女性の低収入や世帯への「包摂」の質に十分に焦点が当てられることはなかった。国際的に見てジェンダー格差の大きい日本において経済危機の影響を検討する際に若年層への着目とともにジェンダー視点は不可欠である。とりわけ非正規化の著しい高卒以下女性の実態の考察はジェンダー平等社会を展望する上で不可欠である。

2. 研究の目的

貧困研究は、単に貨幣収入による経済的困難を論じるのではなく、相対的剥奪論、社会的排除論を経て、人間の生活の質を問う方向へと展開している。本研究は高卒以下若年層の生活実態のジェンダー分析を、特に親やパートナーと暮らす、世帯に包摂された女性に焦点を当て、世帯内依存関係を、経済やケアだけでなく、幸福度、暴力、自尊感情に着目し、世帯で暮らす若年女性の意識及び家族との相互関係などのジェンダー分析によって課題を明らかにすることを目指した。貧困研究の新たな展開においては、社会的包摂が目指されてきたが、「包摂」とみなされる関係が必ずしも生活の質を維持・向上するとは限らず、抑圧関係に転化し、暴力や虐待の温床になりうる可能性も視野におくことがジェンダー分析には不可欠である。そのために、幸福度指標やケイパビリティ概念を取り入れた分析を行った。

3. 研究の方法

(1) 先行研究及び変数

フリーター・非正規労働研究、貧困・社会的排除研究、幸福度研究に加えて、ケイパビリティ・エイジェンシーの視点による生活の質研究における主な調査研究を参照し、追加調査の質問項目を設定した。追加の質問項目は、「暴力の怖れ」がどのような環境と人間関係から生じるかについての質問、幸福度についての回答の際の判断に置いて重視する項目、自尊感情に関連して、周囲から尊重されていると思うかといった自己尊重感などである。

(2) 調査方法

2016年11月から2017年1月にかけて、2014年4月に実施した調査の回答者2000名(男女各1000名)への追跡調査を実施し、721名(男348名女373名)の回答を得た。対象は最終学歴が高等学校卒業以下の、18歳以上34歳以下の男女という、フリーター定義で採用される年齢層である。但し女性のみ既婚者を省く二重基準は採用せず、既婚女性も対象である。2014年調査を依頼した株式会社マイボイスコムに委託して2014年調査時の対象者への追跡インターネット調査を行った。

(3) 分析方法

2014年度に実施した調査の回答者に対する2016年実施の追跡調査データを用いて、分研究目的にあげた幸福度、暴力、自尊感情についての分析を行った。

まず、生活の質を主観的に示す幸福度について、関連項目を抽出し、次いで「本人の年収」および「自分の納得する生き方」の選択という項目との関連を分析し、ここからみえる彼女たちの幸福度の特徴の抽出を試みた。

次に、生活の質をおびやかすリスク要因となる「暴力」についての検討を行った。分析

の対象者は、母子世帯や一人暮らしを除いたパートナーや親等と同居している女性である。家族関係の中で暴力をふるわれた経験の比率を明らかにした上で、その経験に女性自身の収入がどのように関連するのかに注目して分析を行った。

さらに、自身の生活の質を主体的に決定、改善しうる可能性の指標として、自尊感情に着目した。本分析では、Rosenberg, M(1965)の日本語版 Mimura C, Griffiths P.(2007)の「自尊感情」尺度を用いて、自尊感情得点を集計し、男女、学歴、雇用形態、収入、婚姻居住状況との関連を分析した。

4. 研究成果

若年女性の生活実態を把握するために、本研究で取り上げた分析視点の一つは「幸福度」であった。分析結果は次である。若年女性の幸福度と関連する変数は、健康、パートナーの有無、現在の暮らし向き、将来の生活不安、自分の納得する生き方の選択、年収であった。ここから分かるように、特筆すべき結果としては、雇用形態は幸福度と関連がなく、自分の年収は幸福度に関連した。さらに、当該質問記述の検討を課題として残すものの、自分の納得する生き方を選択する回答は幸福度を低下させる傾向がみられた(マイナス効果)。家族に迷惑をかけるなら自分の納得する生き方をしない方が、幸福度が高いことが測定された。男性の場合はこうした関連がみられなかった。

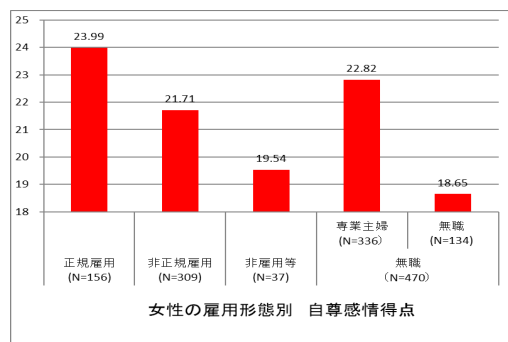
暴力についての分析結果は、暴力をふるわれた経験比率は、パートナー同居グループの方が親等同居グループに比べ高いが有意な差はなかった。暴力経験との関連については、「本人の年収」、「暮らし向き」、「ネットワーク」、「子どもの有無」、「年齢」、「学歴」を独立変数にして分析した結果、両グループとも「本人の年収」と「暮らし向き」に関連がみられた。

「暮らし向き」は両グループとも苦しいほど、比率が高くなっていった。「本人年収」は、パートナー同居グループは年収が高くなるほど暴力経験比率が高くなるのに対し、親等同居グループでは逆の関係がみられた。親等同居の女性にとっては女性の経済力の向上は、世帯内の地位を高めるために暴力の発生を抑える(バーゲニングモデル)のに対して、パートナーの間では、パートナーの地位をおびやかすものとなり、暴力の発生を高める(バックラッシュモデル)のではないかという可能性が示唆された。

自尊感情については次のような知見が得られた。女性より男性が、中卒より高卒が、非正規雇用者より正規雇用者が親同居者より一人暮らし、既婚者が自尊感情得点は高い。

女性については正規雇用者と専業主婦に有意差はないが、既婚女性のみで比較すると、正規雇用者、非正規雇用者、専業主婦、無職の順となる(図)。本人年収と自尊感情は有意に正の相関がある。

以上から家族への包摂は必ずしも女性個人の良好な生活の質を保証するものではなく、包摂の質が問われなくてはならない、との結論を得た。さらに2017年度の分析では、女性の特徴として意思決定と幸福度に正の相関が見られない、女性の収入の上昇は暴力の経験をむしろ増加させる等の結果が得られ、世帯内分析の目標として、女性の自己決定権等を含む行為主体性(agency)に着目した研究への発展を、研究の次のステップとして目指すことになった。



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

中原朝子、伊田久美子、山田和代、熊安貴美江「パートナーのいる若年女性の隠れた貧困と生活の質」「経済社会とジェンダー」日本フェミニスト経済学会誌第 1 巻、2016 年.47-62. 査読有

Tomoko Nakahara, Kumiko Ida, Kazuyo Yamada, Kimie Kumayasu, *Rethinking Social Inclusion Concerning the Hidden Poverty of Young Women in Japan*, 女性学研究：大阪府立大学女性学研究センター研究論集, 25 号、2018 年 3 月. 62-65. 査読無

伊田久美子「歴史をめぐる政治：イタリア・フェミニズム運動の新展開」女性学研究：大阪府立大学女性学研究センター研究論集, 25 号、2018 年 3 月. 82-97. 査読無

[学会発表](計 8 件)

中原朝子・伊田久美子・山田和代・熊安貴美江「親同居の実態が語る若年女性の貧困」日本女性学会、2015 年 5 月 17 日、ウイングス京都。

Tomoko Nakahara, Kazuyo Yamada, Kimie Kumayasu, Kumiko Ida. *Poverty of young women living with parents in Japan*, 17-7. 2015. International association for Feminist Economics, Berlin School of Economics and Law.

Kumiko Ida, *Neoliberalism and Feminism: from the Viewpoint of Women's Agency*, International Association for Feminist Economics, Sungsin University, Seoul, Korea, 30-6.2017.

Tomoko Nakahara, *Understanding the Quality of Life of Young Women: Focusing on Self-esteem and the Fear of Violence*, International Association for Feminist Economics, Sungsin University, Seoul, Korea. 30-6.2017.

Kumiko Ida, *Issues of women's advancement in Japan: Understanding of the Quality of Life of Young Women*, European Association for Japanese Studies, Universidade Nova de Lisboa, Lisbon, Portugal, 1-9.2017.

Kimie Kumayasu, *Quality of life of young women: from the view point of self-esteem*, European Association for Japanese Studies, Universidade Nova de Lisboa, Lisbon, Portugal, 1-9.2017.

Kazuyo Yamada, *The living conditions of Japanese young women focusing on employment, finances and happiness*, European Association for Japanese Studies, Universidade Nova de Lisboa, Lisbon, Portugal, 1-9.2017.

Tomoko Nakahara, *Understanding the Quality of Life of Young Women: An Exploration of their fear of Violence*, European Association for Japanese Studies, Universidade Nova de Lisboa, Lisbon, Portugal, 1-9.2017.

6. 研究組織

研究代表者

伊田 久美子 (IDA Kumiko)

大阪府立大学大学院・人間社会システム科学研究科・教授

研究者番号：20326242

研究分担者

山田 和代 (YAMADA Kazuyo)

滋賀大学・経済学部・教授

研究者番号：50324562

研究分担者

木村 涼子 (KIMURA Ryoko)

大阪大学大学院人間科学研究科・教授

研究者番号：70224699

研究分担者

熊安 貴美江 (KUMAYASU Kimie)

大阪府立大学高等教育推進機構・准教授

研究者番号：90161710

研究分担者

中原 朝子 (NAKAHARA Tomoko)

神戸大学・男女共同参画推進室・助教

研究者番号：50624649